

## 復活節第2主日

2011/5/1

聖ヨハネによる福音書第20章19～31節  
於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

ご復活日に続く今日の主日の福音書は、ヨハネ福音書の弟子たちの中に姿を現されたイエスさまの物語が、伝統的に選ばれ読まれて来ました。現行祈禱書では、毎年、復活節第2主日には、この物語を読むことになっています。

前半は、イエスさまが復活されたその日、つまり週の初めの日、日曜日の夕方に起きた出来事です。そして、後半は、それから8日経って、再び週の初めの日が巡ってきた折りに、弟子たちが集まっていたときのことが描かれています。弟子たちは、主の日ごとに集まって礼拝をしていたという、初代教会の姿がここには反映されていると考えることが出来るでしょう。

弟子たちの様子は、「ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」と記されています。ユダヤの当局が、弟子たちのことを追及して、イエスさまと同じように逮捕し、十字架につけようとするかも知れないという恐れを、弟子たちは抱いていました。弟子たちは決して強い人間ではありませんでした。チョットしたことで直ぐに心がぐらぐらと揺り動いてしまうような情けない人間でした。わたしたちと何ら変わる事のない、弱さの中に生きていた人たちです。

今日の物語に出てくるトマスも、その一人です。トマスはかつて、「イエスさまと一緒にユダヤに行って死のうではないか」と、弟子たちに言ったことがありました(11:16)。これは、マリアとマルタの兄弟のラザロが死んだという報告を受けて、イエスさまがラザロを起こしに行くと言われた時のことです。

このことの前に、イエスさまはユダヤ人に石で打ち殺されそうになりました。その地に再び行こうとするのですから、イエスさまが愛するラザロを生き返らせるためにマリアとマルタの姉妹の家に向かったのは、死の危険を覚悟した上での行動でした。

トマスは、その時、イエスさまに自分たちもついて行って、イエスさまの身にふりかかろうとする苦しみを共にしようと、大変勇ましく情熱的な言葉を吐くわけです。この時は、何

事も起こらなくて済んだのですが、ラザロが甦らせられた出来事を契機にして、ユダヤの最高法院は、イエスさまを殺すことを決定しました。そしてイエスさまの逮捕、十字架の死へと事態は進んでいくのですが、この事件の間、トマスの姿は何処にも見当たりません。

イエスさまと一緒に死のうと言ったトマスの言葉は、単なる強がりだったのでしょうか。そうではないと思います。トマスは本心からそのように思ったのでしょうか。イエスさまに深く傾倒し、イエスさまのためなら自分の命も惜しくはないと、本気で思っていたことでしょうか。しかし、いざ、そのような時が目の前に迫ってきたときに、その場に留まることが出来なかったのです。トマスも、イエスさまを裏切り、見捨てて、何処かへと逃げて行ってしまったのです。勇ましいトマスもまた挫折を味わうことになりました。

ご復活日の夕方、イエスさまが十字架上で亡くなって3日目に、トマスだけが弟子たちの中にはいませんでした。このことは、わたしたちの想像力をかき立てます。なぜ、トマスだけがいなかったのか。トマスは、自分が立派なことを口にしたのに、その自分の言葉を守ることが出来なかったことに対して、嫌気がさしてしまったのでしょうか。そのために激しい自己嫌悪に捕らわれて、他の弟子たちと顔を合わせることが出来なかったのでしょうか。他の弟子たちよりも人一倍、イエスさまを裏切った、見殺しにしたという気持ちに強く捕らわれて、慚愧の念に堪えられず、弟子の群れの中に帰るにも帰れずに、一人嘆きさまよい続けていたのでしょうか。或いは、自分自身を信じるが出来なくなって、悔しさに自分を責め続けていたのでしょうか。イエスさまに抱いていた期待が破れ、大きな失意の中で孤独な時を過ごしていたのでしょうか。

いずれにせよ、トマスはそこにはいませんでした。トマスを除いた弟子たちは恐れの中で集まっていました。マグダラのマリアが、わたしはイエスさまを見ましたと報告しても、イエスさまの言葉を伝えたことも、それが何のことか、弟子たちには十分に理解できたわけではありません。いや、むしろ、マグダラのマリアが言うように、イエスさまが現れたとするならば、イエスさまを裏切った自分たちはどうになってしまうのか。イエスさまによって

自分たちの行動が厳しく叱責され、断罪されて、厳しい審きのもとに置かれるようになるかも知れない。

弟子たちの恐れは、ユダヤ人に対するばかりではなく、イエスさまから、お前たちは裏切り者だと烙印を押され、その罪を裁かれることへの恐れでもあったのかも知れません。弟子たちは家の扉に鍵をかけていただけではなくて、自分たちの心の扉も固く閉じて、その中に誰も入れないようにしていたに違いありません。弟子たちのいた場所も、弟子たちの心の内側も閉じられた状態にあったのです。

その弟子たちの真ん中に、突如としてイエスさまが立たれます。そして、「あなた方に平和があるように」と言われました。シャロームと言って挨拶をなさいました。そのイエスさまは、紛れもなく、あの十字架の上で息を引き取られたイエスさまです。ご自分の手の釘打たれた跡を、そして脇腹の槍傷を弟子たちにお見せになりました。その傷跡は、弟子たちの裏切りのしるしです。弟子たちがイエスさまを見捨てて逃げていったことによって、イエスさまに負わされた傷口です。そこからイエスさまの血が流され、水が流れ出た傷の跡です。弟子たちの罪を担って十字架に掛かって下さった、そのイエスさまが、今、弟子たちの中に立って「あなた方に平和」と言って下さっているのです。

キリストの平和、それはどこから来るのでしょうか。それは十字架の死を通してです。平和とは最もかけ離れた凄惨な出来事の彼方から突如として現れるのです。それが神さまのなさりようです。戸を閉じて引きこもっているそのまっただ中に、思いがけない仕方でもって平和が支配するのです。

話は変わりますが、阪田寛夫という作家をご存知だと思います。『土の器』という作品があります。その中で自分の母親のことを描いているのですが、母親は80歳になってから膵臓癌に罹りました。治療のために沢山のパイプにつながれるのですが、その姿を「人間濾過器」と表現しています。濾過器というのは、普通は不純物を取り除いて綺麗な液体をこし出すわけですが、それが阪田の母親の場合は逆で、体に入れるときには透明な輝くような液体であったのが、出て来るときには血膿になって、見るからに母親の肉体のむごたらしい状態を顕わにしているのです。そんな母親の姿を見ることができずに、

阪田は、それまで自分が否定的に関わってきた神さまに、遂に祈るのです。祈らざるを得なくなるのです。

しかし、その阪田を慰めることになったのは、当のむごたらしい姿を阪田の目の前に曝している母親の2つの不思議な動きでした。1つは、「ありがとう」を繰り返す唇の動きです。最初、阪田はそれは自分たち家族に向けられたものだとして理解していましたが、そうではなくて、母自身がいま遭遇している闇と荒れ狂う風を突き抜けて、はるか彼方に存在するものに向けて発せられているのだと思うようになります。

2つめは他の人には昏睡としか映らない、阪田と家族にしか分からない母親のほほえみでした。痛みの度合いがひどくなってから、どうかした拍子に目があって笑い返されると、それだけでもう何も要らないという気持ちに阪田はなるのです。この「いい顔」は体の芯からにじみ出ていると思うのです。母親の存在が濾過器そのものに近づけば近づくほど、慰めているのは阪田でなく母の方だと感じるのです。母親は無意識の彼方から慰めの光を放つ存在となっていたのです。看病する側が病人の苦しみを和らげ、慰めを与えようとしていたところに、逆に、その苦しみの極みにある母親から慰めを与えられることになるのです。老いと病と死の究極において母親が示したものは、「光のような微笑み」であり、「ありがとう」という感謝でした。そのことを知って、阪田は、母親が病気が悪くなる前に書いた文章の言葉をそのまま生きていることを認めるのです。次のような言葉です。「人生は過ぎゆかなければならないように出来ている。そのために神さまは或いは病気を、また死を与えて転機を備えて下さる。」過酷な運命に襲われた母親が、それでも「老いも病も死も全て神備え給う道」として受け入れたと思うのです。そのような母親の姿を通して、阪田自身、母親の死に至る病は可哀想な理不尽なものではなく、「神の備え給う道」、即ち、摂理として受け入れるようになったのです。

阪田は、その体験を通して「光は暗きに照る」という聖書の御言葉に辿りつくのです。これはまさに阪田自身の復活の体験にほかならないと思います。

この阪田寛夫の話を、以前にあるところで話す機会がありました。話が終わって直ぐ、ある方がご自分の体験を語ってくださいました。その方は、「生きるか死ぬかの病気をくぐ

り抜けることを通して、愛情をもって神さまを信じることができるようになった」と、その時に言われました。わたしは、それを聞いて、信じるということは、頭で分かるということではなくて、愛の交わりが、そこに起こることにほかならないと教えられたと思いました。そしてその愛の交わりが起こるのは、苦難を通して、そして苦難の向こう側から、苦難を突き抜けて現実となることを知らしめられたように思います。不安や恐れ of 支配のもとにあって、平和や慰めなど望むべくもないと思われるような現実のど真ん中に、わたしたちの思いを超えてその彼方から、「平和があるように」というイエスさまの御言葉が現実となる、それが復活のイエスさまとの出会いであることを、心に留めることができたように思います。

イエスさまはトマスに向かって、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と呼びかけています。暗黒の極みにこそ、光は輝きを増すことを信じるのが、命の道を歩むことにほかなりません。「わたしは道である」と言って、父なる神さまのみもとにわたしたちを招いてくださるイエスさまに従って行く者でありたいと思います。